

---

 書 評 ・ 紹 介
 

---

Kerstin Lindahl-Kiessling and Hans Landberg (eds.)

*Population, Economic Development, and the Environment*

Oxford University Press, Oxford, 1994, 284pp.

サイモン対アーリック論争に典型的に見られるように、経済学者と生態学者の間には、人口の環境への圧力に関する意見の対立がある。これは過去のトレンドを将来の予測に利用し得ると考える経済学者と、突発的で破局的な事態の発生を常に憂慮する生態学者の、世界観の対立であるように思われる。しかし本書では Hollings が生態学者の悲観的世界観を明らかにしているが、経済学者はもっぱら人口の開発への影響を扱っているため、生態学者と対立するはずの楽観的世界観は現われない。

その Holling の第 4 章は、「なぜ生態学者は悲観的なのか」「なぜ世界は既に崩壊していないのか」「なぜ人口増加は憂慮すべきなのか」という 3 つの問に答える形で書かれている。要約すると、答は順に「人間個体群以外ではマルサスの積極的抑制が常に働いているから」「異質性と多様性がエコシステムに抵抗力を与えているから」「異質性・多様性が急速に失われつつあるから」となる。アーリックほどではないが、悲観的世界観によって結論が予約されているための強引さは、この章にも感じられた。例えば人間個体群には予防的抑制や新マルサスの抑制があるのに、他の動物個体群の積極的抑制だけを見て悲観的になる理由が納得できない。世界が既に滅んでいない理由については、エコシステムの耐性も重要ではあろうが、 $I = P A T$  式の  $T$  (技術) の部分で環境へのダメージを減らすのに成功した例は多い筈なのに、この点についてはほんの付け足し程度にしか書かれていない。こうした牽強付会が目立ち、読んでいて違和感を感じた。

序章以外の他の章は全て経済学者によるものだが、環境ではなく開発を論じているため、生態学者との対立は生じようがない。Willis の第 6 章は、経済発展と出生力の関係を焦点に、マルサス、新古典学派、サミュエルソンのマクロ理論と、新家政学派やコールドウェルらのミクロ理論を批判的に体系づけている。出生力の経済学理論を秩序立てて理解するには最適な一章だが、この分野に関してある程度の知識がないと理解しにくいので、入門用としては勧められない。なお、Willis 自身の見解では、エンゲルの法則(食糧需要の所得弾力性は 1 より小さい)によって経済成長とともに農業部門の貢献度が下がり、人的資本投資が進むことが、出生力転換と一層の経済発展の鍵とされる。

McNicoll の第 8 章は、家族、地域、法、階層、労働市場といった制度の出生力に対する影響を考察する。政府の役割とその有効性にもとづく出生力転換の 5 類型をはじめ、アフリカの marriage valve の出現や制度変動の経路依存性など、興味深い知見が含まれている。5 類型の最後のものは、サハラ以南アフリカの「リネージによる支配 (lineage dominance)」で、出生力転換の類型と言うよりは転換がまだ始まっていない状態を指す。McNicoll は、子の需要低下と AIDS の影響で、この地域でも出生力が低下するだろうと述べている。しかし現にこの地域で出生力低下が始まったという報告が相次いでおり、既に予想の段階ではなくなっている。

Fogel の第 9 章は、ノーベル賞を受賞した体格と死亡の理論によって、マルサス理論に新たな光を当てている。Fogel の主要な論点のひとつは、19 世紀ヨーロッパにおける死亡率低下の大部分は、慢性的栄養失調の解消に伴う体格の向上によってもたらされた、というものである。このため食糧と人口の均衡点は人口の体格によって異なり、単一で不変の生存水準 (subsistence level) という概念は成立しなくなる。Fogel はまた、小体格・高死亡の均衡点では、カロリー供給量の不足によって人口のかなりの部分が労働不能となり、労働時間も短くなるを得ない点を指摘する。「マルサスの畏」は、死亡率や生活水準のみならず、労働力率や労働時間にも及んでいるのである。

タイトルに「環境」の文字はあるものの、本書での環境問題に関する議論は、質・量とも注目すべきほどのものではない。人口と開発をテーマとする経済人口学の研究書と考えた場合には、最先端の重要な論文を含む有益な一冊と言える。

(鈴木 透)